

道で西垣君が近づいて来た

「不思議なことがあるものです

あなたより先に下りて大雁塔を見上げてみますと

雁の列が頂上をかすめて行くのが見えました」

たつたいま登つて来た大雁塔の上の空を

雁の列が飛んで行く有様が目に浮んだ

「さうですか」

と僕は答へただけだった 「出来すぎだ

大雁塔を雁の列なんて」と思った

あまり感動は示さなかつた

帰国して何日かたつて西垣君から電話があつた

「あなたが西安のミーティングで話された中国兵とのことを書いていいですか」

居庸関と書いてあるペンキの立札をバスの中から見た時

中学生の頃に習つた地名が

あんまり身近にあるのにびつくりした

八達嶺への登り坂 バスから下りて

アスファルトの道を外れて近道をしようと

涸れ沢を行つた

細い木がまばらに立つてゐた

上の方から中国の兵士が五六人下りて来た

僕は自分の息子より若い彼等を見て

「ああ もしかするとあの時僕は彼等の父親たちとはげしい戦ひを戦つたのだ」

と考へた 考へた時 転倒した

気がつくとな人の兵士が僕を抱きおこしてくれてゐた

赤い肩章に星はない

太つた彼の顔には桃の実にあるやうな生ぶ毛が見えた

大事なものを取り扱ふやうに僕の身体を起こし

別の兵士も さらに 僕に向つて手をさしのべてゐた

「ありがたう ありがたう」

やはらかい手と握手した

腰を痛めて 洛陽で僕は立てなくなつた

腰が石のやうに重くなつた

少しよくなつても杖をついて歩くのがやつとだつた

西安についた日は ややあたたかかつた

僕は杖をついて大雁塔の頂上まで登つた

西垣君は僕を支へてくれた

頂上につくのを見定めて僕から離れた

西垣君からもう一度電話があつた

「枚数の関係である話は書くことが出来ませんでした」

西垣君は急に亡くなつた

葬儀がすんで焼場に行つた

そこは僕の姪が住んでゐるアパートから近い

いつだつたか姪の室から煙突を見て

「あれは何の煙突だらう」

と聞いた 姪ははにかんだ笑ひをして答へなかつた

すさまじい重油の燃える音

こもつてゐるにほひ

時間がたつて引き出された台の上

西垣君は確実にこの世の人ではなくなつた

離れた場所から僕は西垣君の方を見た

骨格のたくましい大きい人だつたからであらうか

台の上に全体がもりあがつてゐた

まだ火の粉が点点とちらばつてゐた

僕は巨然の径奇な山岳図巻を思つた

層巖生動

白磴磴

西垣脩君

羽音も荒く

一羽の雁が

君の上を切るやうに飛んだ

先導か

はぐれたる者か

はるかに

渡つた